
IS ~ Along with the memories ~

暁晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS\ Along with the memories\

【Nコード】

N7432X

【作者名】

暁晃

【あらすじ】

テンプレの神様によって『インフィニット・ストラトス』の世界へチート付きで転生させられてしまった主人公、霜月一は、自分の知る世界と違う世界で何を思い、何をするのか？自分の存在価値をこの世界で見出すことが出来るのか？
月はいつも、空にある。

プロローグ（前書き）

初めまして！

まずはここまで来ていただいた方に感謝します。

作者は文才ありませんが、ご期待に添えることができるよう頑張ります！

よろしく願います。

プロローグ

……ハッ！！

私は、A Bの音〇のように大の字で白い空間に寝ていた。

「ここは……？」

確か私は高校に登校途中だったはずだが…

脳裏を色々な考えが巡る。道で倒れて連れてこられた、今昏睡状態にあり、これは意識の中なのだ、等々。

そしてある考えが浮上した時

……「目が覚めたか？」

ふと隣を見てみると、一枚の布を纏った青年がいた。

……「青年か…お主よりは長く生きているのだがな…」

心を読まれたらしい。ここでさっきの考えが確実なものに変わった。

「私は……死んだのか？」

……「ほう、自分の現状を理解できるとは…お主、さえてるのう」

…何故か褒められた。私はそんな事は無いと思うのだが。

……「確かにお主は死んだ。だからここにいるのだ」

…いきなりそう言われても訳がわからない。貴方は何者だ、いや、あるいは…

……「そうだ。私は神だ」

……唐突にそう言われ信じない人間が何人いるのだろうか？しかし、私の考えていることと一致したので敢えてスルーさせてもらった。

……「お前が死んだのは私のミスだ。のうのと生きている殺人犯を死なせたかったのだが……名前が似ていてな。お主が死んでしまった。すまない」

……そうか、死因はなんだったのだ？

……「うむ。遙か彼方より飛んできたこんにやくの角が頭に当たって死んだのだ。すまないと思っっている」

私はそんなみじめな死に方をしたのか。というよりもこんにやくの角で人間は死ねる……のか？

……「そこで、私はお主に転生という道を提示しよう。タダとは言わん。好きなだけ能力をくれてやる」

……私が元いた世界は……すでに死体になって無理だろう。

テンプレの神様の如くそういった神は、私が愛読している『インフィニット・ストラトス』（以下IS）の世界へ転生させてやる、と言った。

正直、ISは最新刊である7巻まで読破済みで、こういう世界には少なからず憧れていた。私も子供ということだ。
ならば……

「身体能力と技能面を軽くチートレベルにしてもらいたい。後IS

適性も高く頼む。ISは……」

私は、ガンダムXに出てくるヴァサーゴが好きである。故に、ヴァサーゴを頼んだのだが……

……「ふむ、それだけでいいならば私は私が適当に色々つけておくとしよう。これでいいのか？」

なんかとてつもなく嫌な予感がするのだが、ここで「ちやちや言うのは悪いだろう。」

「ありがたい。何から何まですまないな」

……「元と言えばこちらの責任だ。遠慮しなくてもよい。ではいいか？ゆくぞ？」

そついうと、私は薄くなっていく。

「ああ、世話になった」

……ふふふ……世話になったか。別れる訳ではないのだがな。

消える間際、そんな声が聞こえた気がした。

T o b e c o n t i n u e d . . .

プロローグ（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
作者は紙の心ですので、やさしくお願いします。

1話 その青年、転生（前書き）

更新しました！

プロローグだけでも多くアクセスがありとても喜んでいきます。

見づらい部分、表現がおかしい部分があると思いますが、やさしく見守って頂けるとありがたいです。

では、どうぞ。

1話 その青年、転生

……ハッ！

私は、見たこともない室内にいた。

体がうまく動かないが、何かに拘束されているわけでないだろう。

(……知らない天井だ……)

そう呟いたはずだった。しかし声は出なかった……

今まであったことを総動員して現在の状況を考えてみる。

私死亡 神様 消失 ？

……つまり今は転生した後であり、私は赤ん坊というわけか？

おそらくあそこにいる若い女性が私の母なのだろう……

とまで考えたとき、ふいにその女性がこちらへと寄ってきた。

……嫌な予感がする……

やめる。こっちに来るんじゃない。せめて私が寝ているときにすればよからう。不意打ちはいけない。私に生き恥を晒せというのか……

……！

こうして、私、霜月一はISの世界へと転生した……

そんなこんなあり、私は6歳になった。

うむ？間はどうしたかだと？あの生き恥を晒すような日々や、特に変わり映えのしない日々を綴って欲しいのか？

とにかく、現在私は小学生である。

ちなみに、私の歳は一夏達と同じようだ。

原作キャラと遭遇することは無かった。雲を掴む様な事だったのであまり意気消沈はしていないが、物悲しさはある。

さて、これまでの私について簡単にお話ししよう。

私の今世の名前は、霜月 一（しもづき はじめ）という。

名前からも分かる通り日本人である。父、母、私という家族構成で、兄弟はいない。

神からもらった力がもう出ているのか、私は比較的早い段階で歩き始め、前世の記憶も合わさり、現在で高校レベルの問題なら普通に解けるぐらいにまでなっている。

まだISは発表どころか開発すらされていないはずだが、物心ついた時には、私の持ち物の中に金色のピアス（シャギア・フロストが原作でつけているやつ）があった。

…これはIS……なのか？

ひとまずまだこれを使ったことはない。

時期が来れば展開して練習もしなければならぬな、と思うだけである。

また、私の思いすぎしでなければ、おそらく声変わり後にはシャギアのようなイケボになりそうである。

ここは神が計らってくれたのだろう。ただ感謝するのみである。

さて、私は晴れて小学一年生となったわけだが、私が所属するクラス（1-3）に、私の肝をつぶす人間がいた。コードギアスに出てくる枢木スザクの幼少期に似た人がいたのである。

名を、枢木 隼人（くるるぎ はやと）と言っらしい。単なる偶然

なのか、はたまた……

私とは違いかなり明るい人間のようなのだが、不思議と出会う運命だったように思える、すぐに打ち解け、友になることができた。

この世界は私が来たことで歪んでしまったのか？何故か、そのような考えが頭を廻った。

単なる気のせいか、はたまたニュータイプとしての（？）直感なのか、どちらにしても今はまだ動けないでいるのだった………

T o b e c o n t i n u e d . . .

1話 その青年、転生（後書き）

誤字脱字、おかしいところ等ありましたら感想にてお願いします。
次回から人物を変えながら話を進めることになりましょうか。
次回もよろしくお願いします。

2話 その青年、困惑（前書き）

更新しました！

まだ長く文を書くことができません……

おかしな所が多くあると思いますが……どうぞ。

2話 その青年、困惑

side 霜月一

衝撃の入学から一年経った。

隼人とは性格は全く違うが、どこか引き合うところがあったのだろうか、あるいは彼の魅力なのだろうか、クラスでもどこか線を引かれていた私は彼を介して少しずつクラスに馴染んでいった。

そして、事件は起こった。

私の両親が亡くなったのである。

酔っ払い運転をしていた車にひかれたのだ。

外見は幼いとはいえ、私の精神年齢は20をとくに越えている。しかし、身近な人が亡くなるという経験は初めてである。当然加害者を恨みもした。しかし、

やはり私は歪めてしまったのか？この世界を。人の運命を。

そんな考えが浮かんだ。

だとしたら、私は何のためにここにいる？

何故私は転生してしまったのだ？

答えなどどこにも無いのだろう。ただ、この頃から私は

この世界にいる意味を見出せなくなっていた…

side 枢木隼人

小学二年生の頃、親友である霜月君のお母さんとお父さんが死んでしまった。

クラスに少しずつ馴染めていけた彼だけど、そのことがあってから近寄りがたい雰囲気醸し出し、徐々にクラスから孤立していった。もちろん僕は彼の親友であり続けたけどね。

彼は叔父と名乗る人に保護されたが、どうも信用できないらしく、遺産を貰いつつ一人で生活している。

…：…：こんなになつてまで、彼は普通とは言えないけど生活してたんだよね…普通できるかな？

僕は彼の親友だ。彼の力になりたい。…でも僕には彼の力になれる力がない…それだから、彼に何もできない自分にイラついた。誰かが支えないと彼は壊れてしまう。そう思わずにはいられなかった…

side ????

”転生者達”は無事に日々を生きているようだ…

この世界がどうなり、”彼ら”はどんな道を辿るのか、そんな事は私にだってわからない。

”彼ら”の介入により、この世界にどれほど”歪む”のだろうか？
私の目的を”彼ら”は果たしてくれるのだろうか？

「……今はまだ…時ではない…」

彼は一人、笑みを浮かべた…

s i d e o u t

……そして二年後、あの事件は起きる。

彼らはその時、何を思い、何をするのだろうか？

これから始まる世界の混乱など微塵も感じさせず、時は流れてゆく

……

T o b e c o n t i n u e d . . .

2話 その青年、困惑（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。

3話 その青年、驚倒（前書き）

本日2度目の更新！

やっと長い話を書けた……それゆえ文がめちゃくちゃになってると思いますけど……

3話 その青年、驚倒

side 霜月一

…両親の命日から一年が経とうとしていた。

未だ両親の他界には心に深い傷がある。おそらく一生残るのだろうな。おかげで友達と呼べる人間は隼人以外いなくなってしまった。彼はいつも私のそばにいてくれた。おそらく私を励ましたかったのだろう。いつしか私と彼の間には深い絆が生まれていた。彼がいなければ、私は……どうなっていたのだろうな。

神にもらった頭脳を使えば衣食住は難無くクリアしていたので、叔父と名乗る者（叔父なのかも知れないが、会ったことがなかったので分からない）からの仕送りもあつたので生活はできていた。

そんなある日のことだった。

私の机に一通の手紙があつた…ちょっと待て、どこから入ったんだ？

疑問に思いながらも封を開けた。すると、

『初めまして、ではないか。この世界についての話がある。明日の零時 2階の応接室に来い』

とだけ書いてあつた。

…最早怪しさしかない手紙だと思う。しかし、”この世界”というワードに引っ掛かりを覚えた私は、ひとまず行ってみることにした。……存在意義は見つかるのだろうか？

指定された建物にきた。こんな建物あったらどうか？今あたりは真っ暗である。当たり前だが。なので調べようもなかった。
…うん？先客がいるな。あれが私を呼び出した人物か？
ひとまず私は応接室と書いてある部屋のドアを開け、足を踏み入れた。

そこで私が見たのは……………

枢木隼人！！？

side 枢木隼人

僕の部屋にあった謎の手紙、その指定通りに僕はこの部屋にきた。応接室と書いてあった部屋はほんのりと明かりが灯っている程度で、3メートル先を見るのが難しい位暗い。冗談じゃないよ？

「う~~~~~ 暗いの苦手なんだよ〜 早く来てよ〜」

誰に言うでもなくそういうと、出入り口のドアが開いた。（怖いので閉めていた。作者がそうだったので間違いない）

やっと来た！まだ零時にはなって無いけど早く来てくれるなら何でもいいや！

そう思って振り向いた。

「……………え？」

そこで僕が見たのは、僕の唯一無二の親友である、

霜月一君であった。

side 霜月一

何故隼人がここにいる？彼が呼んだにしては様子がおかしい。あつちも予期していなかったようだ。

霜「どうして…君が…？」

隼「どうして霜月君が…？」

やはり向こうも驚いているようだ。と、困惑している間に、時計の針は零時を指した。

その時、虚空から声がした。

？「お、二人とも来てくれたのか。特に霜月は来ないかと思っていたが」

霜・隼「！！！」

声がした方を見ると、何故かあったクローゼットを背にし、黒いスーツを着た青年が立っていた。

？「ふむ、まあ立ち話もなんだ、来たまえ」

そう言うと、青年はクローゼットを指差した。

霜「…は？」

私のこの対応は当たり前だったと言えよう。クローゼットを指差して来いと言っているのだから。

？「何をしている？早く来なさい」

言うなりクローゼットの戸を開け、”入って”行った。

何なんだ？さつきからおかしな事ばかりではないか。私がこの世界に転生したのはそこまで影響力が…ふと、あの手紙の分が頭をよぎった。

『この世界について話がある』

私は意を決してクローゼットの中に飛び込んだ！

………うん？私はさつきまでコンクリートむき出しのビルにいたはずだが……

今私がいるのは、まるで未来都市のようなビルの中にいた。隣には隼人がいる。あいつもここに来れたのか。と、突然壁から（？）声がした。

「シモヅキ様とクルルギ様ですね。前の部屋にお入りください。」

もうこうなればヤケである。私はその扉を開け、その部屋に入った。隼人も恐る恐るついて来ているようだ。

？「久しぶりだな。霜月一、柘木隼人」

そこにはさっきの黒スーツの青年が社長椅子みたいな物に座っていた。

霜「私たちを知っているのか？お前は誰だ？」

声が震えているな、柘木に関しては筋肉がつきそうな位足を震わせている。

？「忘れたか？私は、神だ」

.....

時が止まったような気がした。
いきなり何を言っているんだ？この目の前の奴は。

？「む、信じないのか？　　、柘隼人」

.....今こいつは何と言った？　　は私の前の名前ではないか...
さて、柘隼人というのは...もしかして...

隼「...何故貴様が俺の前世の名前を知っている？」

...さて、こいつは何と言った？というかこんな口調で話すのを聞くのは初めてだ...

？「だからそれが私が君たちを転生させた神だという証拠にならないか？自分が転生者だということは自身以外誰も知らないはずだろ
う？」

……さつきから訳が分からない。確かに私は転生者で私以外は誰も知らないはずだ。

では隼人も…転生者なのか？

霜・隼「お前は…転生者なのか？」

何ということだ。見事にハモったじゃないか。

？「さて、なんなら君たちの死因も言っただろうか？」

霜「……分かった。貴方があの神ということは認めよう。で、今は
どういう状況なんだ？何故私と隼人は呼ばれたんだ？ここはどこな
んだ？何が望みだ？何が……」

私にしては珍しく動揺していた。当たり前か、こんな状況下では気
がおかしくなりそうだ。

神「質問は一つずつにしてほしいものだ。まずは自己紹介といこ
うか」

霜「何を……」

神「神では外界で呼べないだろう。私の事は…」

クワトロ・ポイボス

と名付けよう。クワトロとでも呼んでくれ。そしてここは、

”月面都市 フォン・ブラウン”だ」

……さて、ここは月なのか？どうしてただのクローゼットが月と繋がっている？

ク「今何故クローゼットとここが繋がっているかと思ったな？後にISという兵器ができるんだが、それに使われている量子変換システムを少し応用したまでだ。早い話がご都合主義というわけだ」

…最早突っ込む気力もない。隼人は隣で固まっている。

ク「私はこの都市全体の長だ。まあこの都市丸々1つの企業なのが。さて、望みだったな…と、聞いているか？」

隼人はようやくとフリーズから解除された。そしてクワトロから告げられたのは

ク「この世界には君たちが来たことで多くの歪みが発生している。その排除が私の望みだ」

…やはり歪んでいたのか…

ク「君たちにはこの都市の一員としてここに住んでもらいたい。もちろんここから地球にも例のシステムで往復できるし、悪いようにはしない」

なるほど。それに私の存在価値私の存在価値があるのなら…

霜「私はその話に乗らせてもらう。だが、隼人には親がいるぞ？親ごとここに連れてくるのか？」

隼「ッ！！！！君に言っていないが、俺は半年前、親に捨てられたんだ。だから連れてくる奴なんていない」

…「いつもいつでとんでもない事を言っ…」

隼「クワトロ、その話、俺も乗らせてもらっ」

ク「そうか…なら住居等は追々話そう。本題に入りたいのだが、いいか？」

…隼人のこと、これからのことは後で考えよう。

クワトロは、深くイスに座ると机に両肘をつき顔の前で手を組み、鋭い眼差しで霜月達を見、告げた。

ク「霜月は知っているとと思うが、後一年後にISというマシンが開発され、日本に二三四一発のミサイルが撃ち込まれる」

…隣で隼人が息をのんでいるのが分かった。隼人はISについて知らないのか？

『白騎士事件』

東博士がISを発表してから一ヶ月後、全世界のミサイルが日本に向かって発射された事件である。

これには東博士が発表したIS、通称『白騎士』がこれを駆逐、続いてきた軍隊を無力化させ、世界にISの圧倒的な戦力差を証明させた事件である。

ク「その事件で『白騎士』というISがミサイルを駆逐するわけだが、『白騎士』が斬ったミサイルは一二二一発、表には全部落とされたことになっているが……」

霜「後残りの一二〇発のミサイルは本当は落ちた、と言いたいか？」

隼「なっ！！そんなことが起こるのか！？」

ク「まあ枢木は知識がないから知らないかもしれないが、落ちたと私は考えている。故に、だ」

そこでクワトロは深く息を吐き、低い声で、告げた。

ク「君たちは、そのミサイルを全て落として欲しい」

T o b e c o n t i n u e d . . .

3話 その青年、驚倒（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
やっとなんかだけ原作に介入できる……

4話 その青年、始動（前書き）

更新しました！

今回で原作に微介入するつもりだったのですが…次回で介入します。
相変わらず長い文ではありませんが…どうぞ。

4話 その青年、始動

side 霜月一

あの後、私と隼人はフォンブラウン第四区にある住居に住むことになり、正式にフォンブラウン社の所属員となった。

資金、物資等はクワトロ（以下社長と敬称をつける）から送られてくる分があるので、叔父とは手を切った。

私の机にあったあのピアス、やはりISのようだ。しかも何故か一次移行は済んでいた。

私の機体は ” ガンダムヴァサーゴcb ” である。二次移行したらどうなるんだ？

隼人はやはり転生者のようで、あの神に「ロボット物だ」と言われ、コードギアスだと直感したらしい、何の迷いもなく「枢木スザクにしてくれ」と言ったらしい。

残念ながらこの世界は『IS』である。少し間の抜けているところがあるが、基本かなりいいやつで、社交性では負けるだろう。

何より、私よりも知能が低い分、身体能力が馬鹿らしく高い。道理で私が運動方面で勝てないわけだ。

彼の機体は” ランスロット・アルビオン ” である。こちらも一次移行済みである。

彼は前世では槍を持つ機会が多かったらしく、剣の扱いが苦手（良い意味で人間のレベルでは無い）らしい。

……さて、こいつの前世はなんだったんだ？

私は、第二区にあるIS第16アリーナで練習をしていた。隼人も

どこかでやっているのだろう。

地球には第八区にある転送ゲートから行ける。外観は飛行場のようである。

私がフォン・ブラウンで驚いたことが、この都市にはかなりの人間が住んでいるということだ。

その人間がどこから来たのか、何故こんな所に居るのかは答えられなかったし、あまり興味も無かった。

そんな常識とかけ離れた日常を過ごし、約1年が過ぎた。とうとうこの時がやってきたのである。

一か月前に無名の博士が『IS』なる兵器を開発、発表したのである。

この瞬間、私と隼人というイレギュラーを抱えた世界は、動き出した。

side 枢木隼人

ちょうど一週間前だろうか？社長から、地球に”その時”が来るまで霜月と待機している、という指示が来た。

霜月君もこれからの展開を知っているようで、妙に落ち着いていない。

僕はと言えば、本当に二三四一発のミサイルが来るなんて思っていなかった。
世界中の軍事機関にハッキングをする能力を持つ人間なんて、普通いないと思っていた。霜月君は出来ると言っていたけど、普通じゃないもんね。

そう、僕は今この時、指定されたポイントで待機しているこの時も、そのニュースが来るまで信じてはいなかった。

全世界のミサイル、計二三四一発が日本に向けて放たれたという情報が知らされた。

何故が予定よりも多い。これは僕たちがこの世界に来た事による歪みなんだろうか？

だったら……………やってやるぞ。

俺のランスロットと、霜月のヴァサーゴで、すべて駆逐するまでだ！

side 霜月一

今さっき、ミサイル二三四一発がこのあたりに飛んでくるといっ情報が出た。社長よりもたらされた。

二三四一？何故そんなに多いのだろうか？これも歪みなのか？

隼人はなんだかそわそわしている。早く自分の実力を試したいのだから。目立ちたがり屋め。

とか言う私も少し興奮していたりする。このヴァサーゴがどのくら

い出来るのか、試してみたい。

……ふと向こうの空より”人”が飛んできた。おそらくあれが白騎士なのだろう。

さて、そろそろか……？

「クワトロより各員へ！これよりミッションを開始する！総員の健闘を祈る！」

隼「オーライ！枢木隼人！行くぜー！……！！！」

霜「了解した。霜月一、出る！」

こうして後に【白騎士】と呼ばれることになる機体と謎の二機とのミサイル殲滅戦が始まった…

T o b e c o n t i n u e d . . .

4話 その青年、始動（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
次回、初の戦闘描写です！ひどいと思いますが……

5話 その青年、介入（前書き）

本日二度目の更新！

書いてて思った。あれ…戦闘描写は？

やはりIS同士の戦闘でなくてはね！うん！

……失礼しました。では、どうぞ。

5話 その青年、介入

side 白騎士

束に白騎士のパイロットにさせられ、ミサイルを落としに来た私だったが、目標地点に来た時、下から謎の機体反応があった。

…馬鹿な！？この白騎士の、ISのセンサーに反応は無かったぞ！？どうやって隠れていたというんだ！？

とその時、白い機体が背中から二本の棒が出たかと思うと、そこから緑色の羽を出し、あり得ない数のエネルギー弾をミサイルの群れに向けて発射し、自身も突っ込んでいた。

……もう訳がわからない…あれもISなのか？

私は、ミサイルを落とすということも忘れて、愕然としていた。

side 霜月一

千冬さんは何もしてくれないのか？…って目の前でこんな事されたら呆然としてしまうか。

さて、私も準備をしよう。

私は、ヴァサーゴの腹部を割り、胸部装甲を展開させ、6枚の羽根を全開にさせた。

side 枢木隼人

俺はミサイルを順調に落としていた。

ある時はスーパーヴァリスのハドロン砲でまとめて破壊し、ある時はスラッシュハーケンで落としてつつも剣で擦れ違い様に切断、またある時はエナジーウイングから粒子を射出、確実に落としていった。その時、後に膨大な熱量を感知した。

霜月が”あれ”を使うのか：なら俺も後ろで待機だな。

隼「おい！そのパイロット！聞こえてるか！？今から俺とあいつはチャージに入る！ミサイルを落としてくれ！」

そして俺は、あいつとタイミングを合わせるために後ろに下がった。白騎士とか言うやつは俺の指示に従ったのだから、ミサイルを落としに前に出た。

霜 チャージが完了した。いくぞ

隼 あいよ！待ってました！

そうして俺は、スーパーヴァリスのフルバースト、エナジーウイングのエネルギー弾を一齐に発射した。

side 霜月一

霜 チャージが完了した。いくぞ

隼 あいよ！待ってました！

隼人の健闘のおかげか、この短時間で空域のミサイルは三分の二ぐらいになった。

私も頑張らなくてはいけませんね。

露 「大地を見ぬまま地獄へ堕ちろ」

私は、ミサイルの群れに向かってトリプルメガソニック砲を放った。

side out

この後、攻勢にでた霜月の活躍もあり、ミサイル三三四一発は一つ残らず落とされた。

後に『白騎士事件』と呼ばれるこの事件は、後に来た軍を白騎士が完全制圧。死者0という行為を容易く成し遂げ、世界にISという兵器の圧倒的な戦力を思い知らせた。

ちなみにヴァサーゴとランスロットはミサイル全撃破後、戦線から海中へで離脱。誰の目にも触れることはなかった。

しかし、ただ一人、白騎士の搭乗者、織斑千冬はあの機体を忘れることはなかった。

そして六年後、彼女はそのISらに再び会うことになる。

序章へ物語の始まる前へ THE END

TO BE CONTINUED!

5話 その青年、介入（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
次回から原作に入ります。

オリジナル設定（前書き）

ネタばれがある…かも。

飛ばして頂いて一向に構わないので…

10/24 機体設定更新

10/25 機体設定更新

オリジナル設定

オリキャラ設定

霜月一

CV・森川智之

所属：フォンブラウン社

身長：185cm

専用機

ガンダムヴァサゴ

一次移行 ガンダムヴァサゴcb

備考

この物語の主人公。

神により、ISの世界に転生した一人。

年齢に釣り合わぬ雰囲気を醸し出している。

幼い頃に両親を亡くし、自身の存在意義を見失っているが、歪みを駆逐するという目的で自身の存在意義を保っている。

前世ではアニメやゲームを好み、隼人とよく談議をしている。IS適性はSランク

転生条件は身体能力と技能のチート化、シャギアとしての能力

枢木隼人

CV・櫻井孝宏

所属：フォンブラウン社

身長：176cm

専用機

ランスロット

一次移行 ランスロット・アルビオン

備考

神によりISの世界に転生した一人。

枢木スザクそっくりだが、これはロボット物と神に言われ、枢木スザクを求めた結果である。

頭脳は転生者の中では低い方だが、身体能力は霜月を上回る。

性格は前向き&脳天気。とりあえず突っ込んでいくタイプである。

前世ではアニメやゲームを好み、霜月とよく談議をしている。

ISランクはSだが、霜月に少し劣る。

転生条件は身体能力の最強化、枢木スザクとしての能力。

クワトロ・ポイボス（神）

所属：フォンブラウン社

身長：不明

備考

霜月や枢木など、多くの人間を転生させてきた神であり、フォンブ
ラウン社の社長、都市フォン・ブラウンの永久大統領である。

神としては、犯罪者を裁き、来世で罪を償わせる事が仕事である。
しかし、たまに間違えてしまう事もあり、案外軽薄である。迷惑こ
の上ない。

未だ彼の正体は誰も知らない。

オリIS設定

ガンダムヴァサーゴ

搭乗者 霜月一

第一形態

ガンダムヴァサーゴcb

第二形態

ガンダムクローケル

装備（cb時）

基本装備 プリセット

ストライククロー×2

クロービーム砲×2

トリプルメガソニック砲

後付装備 イコライザ

ストライクシューター×2

装備（クローケル時）

基本装備 プリセット

ストライククロー×2 ストライクビームクロー×2

クロービーム砲×2

トリプルメガソニック砲

ツインサテライトキャノン

後付装備 イコライザ

ストライクシューター×2

正宗

ガンダムアローケン

??????????

単一仕様能力 ワンオフ・アビリティー

??????????

備考

霜月一の専用機。

神より授かった機体であり、ガンダムヴァサーゴをモデルに造られている。

詳細はまだ不明。

ランスロット

搭乗者 枢木隼人

第一形態

ランスロット・アルビオン

第二形態

ランスロット・トリトン

装備（アルビオン時）

基本装備 プリセット

メジャーバイブレーションソード×2

スラッシュハーケン×4

エナジーウイング（6枚羽）

後付装備 イコライザ

スーパーヴァリス×2

その他

ランドスピナー×2

装備（トリトン時）

基本装備 プリセット

メジャーバイブレーションソード×2 ビームトライデント

スラッシュハーケン×6

エナジーウイング（8枚羽）

後付装備 イコライザ

スーパーヴァリス改×2

??????????

単一仕様能力 ワンオフ・アビリティー

??????????

備考

枢木隼人の専用機。

神より授かった機体であり、ランスロットをモデルに造られている。

詳細はまだ不明。

月面都市 フォン・ブラウン設定

月面にある都市。

クワトロが創設、フォンブラウン社の本社であるが、都市としての機能性も十分にある。

一つのクレーターをそのまま使い、面積は東京都23区よりも少し小さい位である。

町全体にシールドや迎撃砲があり、隕石などを防ぐことができる。

都市の形は円形で、本社のある第零区を中心として第八区までである。
(ピザを切り分けたような形)

第零区：フォンブラウン本社、フォン・ブラウンの管理施設がある区間。それ以外には特に何も無い。

第一区：人々の精神の安定を目的とした区間。
主に娯楽場がある。宇宙で自然を見かけることはないので、地球に見たてた自然公園もあるが、そこは地球よりもきれいだ。機械で管理されている事が少し残念ではある。
スポーツ場や図書館、どうなっているのかはわからないが地球の電波を受信しているTV、ネットも使用可能であり、息抜きには最適の場所である。

第二区：ISなどの兵器運用を目的とした区間。
シュミレータ施設や、ISのアーナが数多くあり、フォン・ブラウンの中で最も面積を有している区間でもある。アーナの数は実

に20を超え、野外での戦闘や高出力兵器の運用を目的としたアリーナなど、多様なバリエーションがあり、隣の区間が娯楽施設などで、訓練に適している場所と言える。

第三区：兵器開発、研究を目的とした施設がある区間。

隣の運用施設とマッチングしており、データがリアルタイムで送られてくる。

当施設には独立型マルチAI「ハロ」が複数配備されており、高速演算、修理、データ管理など、幅広い分野で活躍している。ISの後付装備 イラコイザ もここで開発が可能である。

第四区～第六区：居住区。

住居に加え、店なども一通りそろっている。もちろんフォンブラウン社の物である。

この都市には何故か多くの人住んでいるが、それでもまだ住居はかなり余裕があるらしい。

第七区：外（地球）から来た人を迎える区間。

高度文明は欠片も見られず、ほとんど地球の文明と同じであるが、第七区の周りには高い壁があり、兵器の働きを妨害するシステムなど、情報の漏えい防止にとても気を使っている。

フォン・ブラウンの住人は、事前に血液中にナノマシンを投与され、それにより区間内の転送ゲートより中に入ることができる。フォン・ブラウンの中では最も面積が小さい。

第八区：地球への転送ゲートがある区間。

主に座標指定で地上へと降りる。地上でやることのある人は多くないので、あまり多くは利用されていない。

なお、各区間は列車のようなものが地下に通っていて、自由に区間
を行き来できる。

第七区には駅などが無い。これは情報の漏えいを防ぐためである。

6話 その青年、入学（前書き）

更新しました！

PV5000、ユニーク1000人突破しました！ありがとうございます！

やっと学園転入です。今回はいつもと比べて少し長め。

文が変なところがあると思いますが…どうぞ。

6話 その青年、入学

白騎士事件から六年後……

ISが世界を左右する存在になった事で、大きく世界は変わった。

その一つとして、女尊男卑は良い例だろう。

ISは、理由は不明だが女性しか動かす事が出来ない。

ISが世界の法となっている今の世なら、そうなるのは必然であるといえる。

だから、このニュースは世界を震撼させた。

『世界で唯一ISを使える男が現れた』

だが、事態はこれだけに止まらなかった。

世界で二人目、三人目が現れたのである。

世界は、新たな混乱に見舞われた……

side 枢木隼人

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

黒板の前でにっこりと微笑む女性副担任こと山田……何て言ったっけ？

兎に角、山田先生はそう言った。

あの人は本当に先生なのかな？

僕には背伸びしていません感があるように見える。僕だけ？

山「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

……しーん……

誰からも返事がない。教室は変な緊張感に包まれていた。

山田先生はうろたえながら自己紹介を求めている。

僕はそんな山田先生を横目で見ながら、霜月君に視線を送った。

霜月君はこうなることも知ってるだろうし、これからの事も知っている。

この物語の知識がない僕にはわからない。

と、一番前にいる男子が窓側に視線を送った。

霜月君いわく、あれは織斑君と篠ノ之さんの感動の再会のシーンなんだとか。

…とてもそんな風には見えないな…

山「織斑くん。織斑くん。」

一夏「は、はいっ!？」

織斑君が山田先生に呼ばれた。何か考えていたのだろう、声がひっくり返っていた。

あゝあ、周りに笑われてるよ。

山田先生がペコペコ謝ったり、織斑君が後ろを向いてたじろいだりした。

一夏「えー…えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

…それだけ？

教室内の視線がプレッシャーに変わる。

霜月君が驚いている。どうしてだろう？

と、

一夏「…以上です」

本当にそれだけだったみたいだ。女子が何人か椅子から落ちたぞ。

と、僕は物凄い威圧感を感じた。僕や霜月君は大丈夫だけど、明らかに普通の人のそれを超えている。

その時、

パアンツ！

織斑君が叩かれた。

その人というのが、

一夏「げえっ、関羽！」

パアンツ！

出席簿から出したとは思えない音が響いた。

？「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

…織斑くんの机に少しヒビが入っていた。生きているのだろうか。

山田「織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

織斑「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

山田「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

織斑先生の口調が変わった。凄い変わりようだ。

織斑千冬……

確かあの白騎士に乗っていた……

そこまで考えたとき、霜月君にアイコンタクトをされた。

「耳を塞げ」

どういふことだろう？ひとまず耳を塞いだ。すると、

「キヤーーーーー！！！」

…ビリビリビリビリ……

突如、ソニックブームが巻き起こった。

耳を塞いでいなかったら即死だった……

……その後も自己紹介はつつがなく行われた。

今は『く』。僕の番だ。

隼「初めまして。フォンブラウン社に所属しています、枢木隼人です。好きな言葉は友情。嫌いな事は他人を卑下すること、またはする人です。よろしくお願いします」

そう僕は笑顔で言った。うん？また霜月君からだ。

「耳を塞げ」

そして塞いだ瞬間ソニックブームが巻き起こったのは言うまでもない。

そして霜月君の番がきた。

霜「初めまして。フォンブラウン社所属、霜月一だ。特に好きな事などは無いが、気兼ねなく接してほしい。よろしく頼む」

その後ソニックブーム（以下略）

こうして自己紹介は窓ガラス三枚を犠牲にして終わった。

side 霜月一

一時間目の授業が終わって今は休み時間である。

私は隼人と前世でのゲームについて論を交わしていた。

一夏「ちよっといいか？」

一夏がこちらに近づいてきて、話しかけてきた。

霜「何だ？」

一夏「お前らが後二人の男子だよな。俺は織斑一夏。同じ男同士、仲良くやっていこうぜ」

霜「ああ、よろしく頼む」

隼「よろしくね。織斑君

」

そう言つて、握手を交わす

。

一夏「俺の事は一夏で構わない」

霜「そうか。では私の事も一でいい」

隼「僕も隼人でいいよ」

一夏「そっか。よろしくな。一、隼人」

余程これまでのプレッシャーがキツかったのだろう。初めて安堵した表情になった。

？「ちよつといいか？」

霜「うん？」

そこにいたのは篠ノ之箒だった。ああ、感動の再会をするのか。

箒「少しこいつを借りたのだがいいか？」

霜「構わない」

隼「いいよ」

そう言うなり、箒は一夏の手を握り、教室の外へでた。

私と隼人は、再び雑談に戻った。

二時間目は、一夏が参考書を捨てたとか、そんな事があった。このあたりは原作通りか。

休み時間、一夏は一人、金髪貴族に絡まれていた。私達の所に来なかったのは時間がなかったからだろう。嬉しい事この上ない。

三時間目、織斑先生によりクラス代表を決める（一方的な）話し合いが行われた。

真っ先に名前が挙がったのが一夏、私と隼人は名前が挙がらなかった。原作通りに進むのだろうか。だとしたらありがた………

一夏「なら俺は一を推薦するぞ！」

…前言撤回。世界は優しくは出来ていないらしい。

とその時、代表候補生のエリート（笑）が怒りをあらわにした。大まかに言うと、恥さらしがどうだの、極東の猿がどうだの、文化が後進的だの、そんなようなことを叫んでいた。実際は、その極東の猿がISを開発したのだがな。

これにより、一夏、ついでに隼人がキレた。面倒事はごめんのだが、しょうがないか。

一夏「イギリスだってたいしたお国自慢無いだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

隼「昔にすぎりついでるだけの小さい孤島の猿が、何を喚いているのやら」

セ「あつ、あなたたちねえ！私の祖国を侮辱しますの！？」

霜「初めに侮辱したのはそちらだろう。言語をちゃんと理解したう

えで生きていかなければならないぞ？」

セ「ぐつ……！ぬぬぬぬぬ！決闘ですわ！！」

一夏「おう、いいぜ。四の五言うより分かりやすい」

隼「はあ、雑魚を相手にしなきゃいけないなんて、めんどくさいなあ……」

霜「だったら、総当たりも面倒だ、トーナメント形式にしないか私と隼人、一夏とオルコットで戦えばいい。それで文句無いか？」

セ「ええ、いいですわ。だれが勝つのかなんて目に見えてますもの織斑「話はまとまったな？それでは一週間後の月曜日、第三アリーナで勝負を行う。各員準備しておくように。それでは授業を始める」

つい言ってしまったが、隼人とは数年ぶりに戦うことになる。これは少し楽しみになってきたな。

放課後、山田先生から寮の部屋の番号を伝えられた。神聖なるバトル（じゃんけん）の末、一夏は1025室、私と隼人は1026室になった。どうせフォン・ブラウンに小型端末を用いて帰るから必要ないのだが。一夏は原作通り、1025室で波乱の生活を送るのだろう。私の知ったことではないがな。

私と隼人は帰宅するなりフォン・ブラウンへ帰還、自身の機体を調節したりしながら一週間を過ごした。

そして月曜日、第三アリーナで勝負が行われた……

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

6話 その青年、入学（後書き）

誤字脱字、おかしな所等ありましたら、感想にてお願いします。
次回は戦闘！うまく戦闘描写が書けるよう努力します。

7話 その青年、出撃（前書き）

更新しました！

戦闘描写のはずだったのに…どうしてこうなった？

滅茶苦茶ですが…どうぞ。

7話 その青年、出撃

side 霜月一

今私はアリーナのゲートにいる。

原作通りなのだが、やはり一夏はずっと剣を振っていたらしい。改めてみると、馬鹿である。

その後、一夏のIS『白式』が来て、一夏は空へ飛んで……押し出された。

原作通りなので割愛

織斑「馬鹿者」
箒「馬鹿だな」
霜「バカだ」

帰還早々フルボッコにされた一夏はその場に倒れ込んでしまった。
ISの絶対防御でも防げなかったらしい。

…さて、次は私の番だな。

(来い、クローケル。)

私が意識するのとISが展開するのはほぼ同時である。伊達に七年も使っていない。

ガンダムクローケル

ガンダムヴァサーゴの第二形態であり、これまでの武装に追加してツインサテライトキャノンがついている。

だが、これは最低出力でもISの絶対防御を貫いてしまうので使えない。学園内で使ったらここは無くなってしまっだろう。正直、邪魔である。

後は後付装備として長さがISの二倍を誇る『正宗』、ストライククローがストライクビームクローになった。

これを展開したとき、織斑先生の顔に驚愕の色が浮かんだ。が、そんな事はどうでもいい。

霜「霜月、クローケル、出る！」

私はバレルロール上昇をし、隼人の元に降り立った。

隼人のISはランスロット・トリトン。

ヴァサーゴと同じく、ランスロットの第二形態である。

メザールバイブレーションソードが無くなり、代わりにビームトライデントになった。

ハイパーヴァリスは新たにミドルモードとショットモードが加えられた。

ミドルモードは連射に優れ、ショットモードはビームを撒き散らす事が出来る。

エナジーウイングの羽の枚数や、スラッシュハーケンも増えており、戦略に幅がでたが、いかんせん隼人は猪突猛进型で戦略というものを知らない。

隼「悪いが勝たせて貰う」

霜「軽口は私に勝てるようになってから言っのだな」

隼「もうあなたには負けない」

霜「フツ…では再び、絶望を贈ろう」

隼人はビームトライデントを、霜月は正宗を頭上で構える独特な型で構える。

山田「それでは初めて下さいー」

始まりのブザーが鳴った。

side out

……開始から3分後……

一夏「どうして二人とも動かないんだ？」

織斑「互いに牽制しあっているんだ。篠ノ之なら二人の間で行われる戦いがわかるだろう？」

第「はい……凄い殺気がするのがわかります。あの二人は一体……」

千冬は考えていた。

（あの赤い機体と白い機体……あの時の機体にそっくりだ……偶然なのか？）

しばらくした後、隼人がビームトライデントを構え、突進した。

霜月はそれを正宗で弾き、返す刀で隼人に太刀を浴びせた。その速さは凄まじく、千冬の目にも捉える事が出来なかった。

織斑（なっ！！私の目で太刀筋が追えない！！何なんだ？あのスピードは！！）

霜「フッ！」

正宗を一閃、衝撃波が隼人を吹き飛ばした。

隼人は体勢を立て直したが、直ぐに連撃を浴びる。

試合は一方的に行われるかと思われた。

だが、隼人は徐々に刃を弾き始め、鏢（？）迫り合いになった。

霜「ほう？何がお前を強くした？」

霜月の質問に隼人は意図を察したようで、

隼「あんたには言いたくないね！」

そのやり取りが面白かったのか、二人は笑った。ちなみにこの間も不可視の斬撃は続いており、隼人はそれを弾いている。

霜「だが、遊びはここまでだ」

八刀一閃

霜月が使うその剣技は不可視の斬撃から一転、凄まじいパワーの斬撃のラッシュへと変わる。

そして八刀目、

霜「終わりだ」

一閃。

強制的に絶対防御を発動させ、そのままシールドエネルギーを0にする。

山田「し、終了！勝者、霜月一！」

試合時間はおよそ10分。

状況が理解出来ない者、呆然としている者、反応は様々だったが、

アリーナは、静寂に包まれていた。

side 霜月一

次はセシリアか……

面倒だな。適当に終わらせるか。

セシリアがこちらに降りてきた。

セ「…あなたに勝とうとは思いません、でも、健闘はさせてもらいますわ」

霜「ほう…一夏と戦い、学んだか。」

まあ、原作通りだな。

山田「両者準備は良いですね？では、始めてください！」

開始のブザーが鳴った。

セ「踊りなさい！私とブルーティアーズが奏でる円舞「邪魔だ」…え？」

私は正宗を一闪、衝撃波でビットを全て落とした。

霜「悪いが、直ぐに終わらせる」

直後、ヴァサーゴは、アリーナにいる全員の視界から消えた。

セ「なっ！ISのセンサーでも見つからない！一体どこに…」

突如、上から声がした。

霜「残念だが、サヨナラだ」

獄門

霜月はセシリアの上から、正宗を下に構え急降下。ブルーティアイズの絶対防御を発動させその勢いのまま落下。アリーナにクレータ
ー作った。

山田「……………はっ！勝者、霜月ー！」

その日、会場が沸くことはなかった…

その後第三アリーナの修理をしたのは私である。はあ、面倒臭かつた…

試合後

織斑「霜月、枢木、話がある。ちょっと来い」

霜 隼「…わかりました」

私と隼人は織斑先生に呼び出された。休ませてくれてもいいのではないか？本当に面倒事が続く…

side 織斑千冬

霜月と隼人は何者なんだ？

あの試合で霜月は強力なステレスシステムを使っていた。それこそ全てのセンサーに引つかからない強さである。

織斑「単刀直入に聞く。霜月、隼人、お前たちは何者だ？」

霜「どういう意味ですか？私はフォンブラウン社所属の霜月一、それ以上でもそれ以下でもありませんが？」

隼「僕も霜月君と同じですね。ただのしがない高校生です」

織斑「何を隠している…？」

霜「人とは常に何かを隠しているものですよ。お先に失礼します。」

霜月は、そう言って去っていった。

隼「…あの時僕の指示に従って頂きありがとうございました。お陰で効率よくミサイルを落とすことが出来ましたよ…では、失礼します」

織斑「！！！！！！ おい待て！！！！！！ どういう事だ！？」

……既にそこには誰もいなかった。

奴らは…何者なんだ…

side 霜月一

山田「…と言うことで、クラス代表は織斑君に決まりました」

どうやら原作通りに事は進むようだ。

私は辞退、恐らくセシリアも辞退だろう。隼人は元から選ばれていない。

一夏「あの…俺負けたんですけど…」

霜「私が辞退したからな」

セ「私も辞退致しましたわ。」

その後もセシリアがなんか言っていたが割愛させていただく。面倒だから。

一夏「だからって…」

霜「一夏、敗者は勝者に従え」

私は無言のプレッシャーを添えてそう告げた。

一夏「……………はい」

その後、クラス代表就任記念パーティーがあったが、やはり面倒なので途中で抜け出した事だけをお伝えしよう。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

7話 その青年、出撃（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
設定の方も更新しなくては…

正直に言つと、もう一人をスザクにしたのは、

「ほう？何がおまえを強くした？」

「あんたには言いたくないね」

このやりとりがやりたかつただけです！
分かる方はわかると思いますが……

8話 その青年、懷疑（前書き）

更新しました！

今回は日常回です。

では…どごぞ。

8話 その青年、懐疑

side 筆者

前回のあらすじー。

何かセシリアが一夏に惚れて一夏が落ちてフラグを建てまくってボコボコにされました。

以上ー。

side 霜月一

………何だったんだ？今のは？

さて、今クラスはクラス対抗戦の話で盛り上がっていた。

何でも勝ったクラスには食堂のデザート半年フリーパスがでるらしい。そんな事もあったな。

皆は一夏の机の周りに群がり、勝ってくれば皆がハッピーだのそんな声がよくきこえる。

そして話は二組の転入生………名前はなんと言ったか？とりあえずその話になっていた。

さっきまで話に加わってなかったセシリアと箒も加わった。二人と

もいつ移動したんだ？

……そろそろか？

「その情報、古いよ」

入り口の前でなんとか鈴なんとかは仁王立ちしていた。人の名を覚えるのは得意ではない……。

「中国代表候補生、フ「鈴じゃないか！久しぶりだな！」ちよつと一夏！最後まで言わせなさいよ！」

ナイスだ一夏。いつも空気を読まなくせに筆者の都合に合わせてくれるとは……

……今日の私はどうしたのだろうか？疲れが溜まっているのか？

私は現実逃避するために机に突っ伏した。

遠くで出席簿クラッシュの音がする。

織斑「霜月！起きろ！」

いや私は起きているのだが……

ひとまず出席簿クラッシュが来そうだ。

ブンッ！……バシッ！……

私は出席簿クラッシュを人差し指で抑えた。結構衝撃が来るな。痺れ
てしまった。

霜「調子が悪いので保健室で休んできます」

織斑「あ、ああ。わかった。次も出られないようなら連絡を入れる」
霜「わかりました」

私は顔をあげた。見るとクラス中の隼人以外の人間が茫然としている。人差し指で止めるのはやりすぎたか？やはり親指あたりがよかったのだろうか？

私は保健室で考えていた。

クラス対抗戦：確か東博士により無人ISが送られてくる日だ…
それだけならなんら問題ないのだが、なぜだか胸騒ぎがする。最悪、アリーナが消し飛ぶかも知れん…
対策を練っておくか：杞憂であることを切に願いたい。

side 枢木隼人

僕は今、霜月君や一夏君たちと食堂でお昼をとっていた。

霜月君は何を考えているんだろう。それがこれから先起こることに
関してなのか、別のことに
関してかはわからないけど、霜月君の勘はよく当たる。

一夏君達はセカンドがどうだと言ってるし、ちょうどいい。僕は
霜月君に耳打ちした。

隼「ねえねえ霜月君。これから先、なにかあるの？」

霜「…ああ、クラス対抗戦で東博士が試合中に無人機を送ってくるのだが、それ以外に何かある気がしてならない。杞憂だといいいのだが…」
隼「そう…なら、手をうつておかないとね」
霜「ああ、ひとまずは社長に相談だな」
隼「うん、そうだね」

といつても、今は何も出来ないけど…

side 霜月一

放課後、私と隼人は寮の隣の部屋から聞こえるビントの音を聞き流しフォン・ブラウンへ行った。

第七区から第八区、列車を乗り継ぎ第四区のマイホームまで戻ってきた。ここで無いと社長とコンタクトがとれないからだ。

霜「社長。今日隼人とそっちに行っていていいか？少し気になることがある」

ク「分かった。22時にこちらへ来い」

短い会話を済ませ、旨を隼人へ伝えたと第三区の研究所へ行った。少し機体の調整もしなくてはいけないし、何より今ビットタイプの新兵器を開発中なのである。
ガンダムアローケルの技術がうまく生かせればいいのだが…

22時

私と隼人は第零区にあるフォンブラウン社の本社ビル80階の社長室に居た。何故こんなに高くする必要があるのでろう？

霜・隼「失礼する」

私と隼人は入室した。社長は、いつもの通りイスに座っていた。

ク「来たか。用件というのは？」

霜「原作通りクラス対抗戦が行われるが、その時に襲来してくるのがただの無人機^{ゴレム}だけでは無い気がしてな。場合によっちゃ向こうのアリーナが吹っ飛ぶかも知れないから、何か対策を立てておきたいな」

ク「……そうか。分かった。当日は一応私も『0』に乗って待機してしよう」

霜「すまない。恩にきる」

ク「用はそれだけか？」

霜「ああ、では失礼した」

そう言うと、霜月はここを後にした。

さて、私の読みが当たればここに”歪み”が来るはずだが…どうなるんだ？

side out

ク「…枢木、本当にお前は何もないのか？」

隼「……この世界のことについては何もわからない。俺はここに居るべきなのか？」

ク「なに、お前の望みはちゃんとかなえてやったさ。まだ時期ではない」

隼「なに？どついうことだ？」

ク「そのうち分かる。そのうち、な」

隼「……？…そうか、失礼した」

隼人もそう言うと部屋を後にした。

ク「さて、この世界はどう動く？」

クワトロは、誰に聞かれるでもなくそう呟き、口を笑みに歪めた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

8話 その青年、懐疑（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。

原作キャラになかなか介入できない…

アローケルはクローケルの後付装備です。

9話 その青年、調節（前書き）

更新しました！

テスト前期間に入るため更新が若干遅れます&本編に行くのが難しくなります。

今回は本編ではないです。

では…どうぞ。

9話 その青年、調節

side 筆者

おはこんばんちわ。

前回のあらすじ

来るクラス対抗戦に向けて機体を調節する霜月であったー

ー夏はビンタされたり怒らせたりしたのであったー

以上ー

side 霜月ー

……最近変な電波を受信する。ニュータイプになったせいだろうか？

今日は休日。私はフォン・ブラウンの第五アリーナ、高威力兵器稼働用のアリーナに来ている。

数時間前……

研究員「君の新装備を開発するためのデータがほしいから、アローケルを使ってみてくれないか？」

霜「わかった。こちらも高威力の武装の調節をする予定だ。第五アリーナで行う。」

研「了解。アリーナ壊すなよ？」
霜「保証は出来ないな」

私は通信を切り、第二区のアリーナへ向かった。

…どうでもいいが、何故交通手段が列車しか無いのだろうか？量子転換システムを使えばいいのだと思うが、これでは時間がかかる…
今度社長に打診してみるか…

霜月は第五アリーナにつくと、クローケルを展開した。

(来い、アローケル)

霜月は、自分の右隣にガンダムアローケルを展開した。

ガンダムアローケル

クローケルの後付装備。外見はガンダムアシュタロンHCのMA形態そのもので、大型ビット兵器である。

一部動作は内蔵型A I 『HALO』がサポートしているが、殆ど霜月の脳波でコントロールしている。

主な武装は両腕のギガンティックシザースと、シザースに内蔵されたシザースビームキャノン。

また、クローケルとドッキングする事によりサテライトランチャーを使用する事が出来、クローケルの追加推力としても使うことが出来る。

研「よし、では始めてくれ」

アリーナに複数のターゲットが現れた。

（行け、アローケル！）

アローケルはビームを連射しながらターゲット群に強襲した。シザースで握り潰し、ビームを撃って落とし、ビットとは思えない戦果を叩き出した。

霜「アローケル、ドッキング！」

H「リヨウカイ！アローケル、ドッキングモード！」

アローケルはこちらに戻り、ドッキングの姿勢に入った。といっても、アローケルが乗りHALOが調整するだけなので大層な事ではない。

（同調率は上々。いける！）

霜「マイクロウエーブ、来い！」

すると、フォン・ブラウン第零区にある特殊発電施設よりマイクロウエーブが送信された。

アローケルはそれを背中のリフレクターで受信、チャージを開始した。

リフレクターが徐々に黄金色の光を放ちだす。

.....

.....

.....

チャージ率100%

その合図を確認するや、ツインサテライトキャノンの砲門を前面に、アローケルからサテライトランチャーの砲門を展開した。

霜「いつけええええ！！！！」

トリプルサテライトキャノン

その名の通り、ツインサテライトキャノンとサテライトランチャーを複合させた技である。

威力だけで言うなら、地図を変える事が出来る位の威力である。現に、ターゲットは跡形もなく消えている。

アリーナの防御壁は破壊されていない。クアトロが何かを仕掛けているらしいが、この威力を防ぐものが何なのかはわからない。

威力こそ高いが、実戦で使うにはチャージが長すぎて無理である。

もし仮にこの兵器を通常のISに使ったら、操縦者もろとも消えてなくなるだろう。それ程に強力な兵器なのである。

霜「ふむ、やはりチャージの効率を良くしなければいけないな。どうだ？データはとれたか？」

研「はい。上々です」

霜月はISを解除し、

霜「わかった。装備の完成を期待している」

そう言い残し、通信を切って去っていった。

さて、これからどうなるのか…

私の生きる意味はどこにあるのだろうか…

私はただ、歩を進めるだけであった。

また列車に乗り損ねた。絶対に打診してくれる。

side 研究員

（アローケルを元にしたIS型の大型ビット……サテライトシステムの搭載……）

どうしてここまで装備にこだわるのだろうか？我々の技術力は開発者である篠ノ之博士をとくに超えているのだから、そこまでする必要はあるのだろうか？

研「戦争でも起こす気なのか？それとも、戦争が起きるのか？」

私はディスプレイの中にある開発プランを見つめた。

研「IS型遠隔操作兵器”Gビット”開発計画か……………」

T o b e c o n t i n u e d . . .

9話 その青年、調節（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。

あの研究員も出演キャラにしようかな…

10話 その青年、破砕（前書き）

更新しました！

相変わらず原作キャラとの交流がない……

では…どうぞ。

10話 その青年、破碎

side 霜月一

今日はクラス對抗戦の当日。

一組対二組の試合（一夏と鈴）が行われてる事だろう。というのも、今私と隼人はそのときに備えアリーナ外で待機している。時が来ればシールドを破壊し中に突入する。

そしてそのときはやってきた。

上空にISが接近するや、両手の巨大ビームを発射、シールドを突き破り中に入ってしまった。

霜「来たか…隼人、ハドロン砲でシールドを破れ」

隼「うん……わかった。やってやる」

私と隼人は飛翔し、ハドロン砲の発射と共に飛び込んだ。

…このアリーナのシールド、脆すぎないか？

一夏「一！隼人！どうしてここに！？」

鈴「うそ！？あれ一と隼人なの！？」

一夏と鈴がこれまで戦っていたんだっただけ。正直邪魔だ。

霜「お前等はさっさと後退しろ。戦力にもならない。邪魔だ」

一夏「なっ……！！もう少して教師が来る！それまで「そんな雑魚ども待つだけ無駄だろう！！」…隼人？」

どうやら隼人は早く戦いたいらしい。この隼人は本当に面倒だ。

霜「隼人。腕は私がもらう。後は好きにしろ」

隼「向こうの攻撃手段潰しちまったらつまらん！どうして腕にこだわる？」

霜「なに、あのエネルギーの充填方法が使えないかと思ってな」

そこまで言うとな隼人は頭をかき、

隼「しょうがねえな…分け前寄越せよ？」

霜「ああ。と」

霜月はまだ居た一夏と鈴を一瞥し、

霜「足が竦んで動けないなら安全な所まで行け。ウロウロされるだけ迷惑だ」

鈴「……わかったわ。もう何も言わないわ」

ふむ、やはり我々では力不足とされているようだな。

まあ、逆の立場なら私もそう思うか。

霜「さて、アローケル、頼む」

霜月はアローケルを展開。高速でゴーレムに突撃した。勿論、迎撃を全て回避して。

霜「取り付き、もぎ取れ」

アローケルは瞬時加速を5重発動し、背後からシザースでゴーレムの両腕を掴んだ。

少しの時間金属の軋む音がなり、両腕を引き離した。

霜「隼人、後は好きにしろ。コアに興味はない」

隼「りょーかい。さーて、やります「隼人！離れる！」な!？」

突如、アリーナ上空から赤黒いビームがゴーレムを貫いた。

隼「あれは……ハドロン砲!？」

見ると、上空に普通のISの1.5倍はある巨大なISが滞空していた。

霜月と隼人はその名を知っている。

霜「ふむ…あれはガヴェインか？織斑先生！生徒の退避は終わってますか？」

織斑「あ、ああ。生徒の退避は終わっているぞ」

隼「そういえば織斑先生たちいたんだ……」

霜「では先生方はそこで固まっている一夏たちと共に退避してください。このアリーナは最悪消し飛びますが、後でなおします。では」

織斑「おい！しも……」

私は一方的に通信を切った。

霜「さて……始めるか。隼人、支援頼むぞ。これからソニック砲を撃つ」

隼「おうよ！任されて!」

霜月はアローケルを回収、両手を地面に差し、発射体勢に入った。

隼人は突撃し、ひたすらトライデントで突いていたが、ことごとくかわされてしまう。

隼「こいつっ……！見た目の割に早い！」

……

エネルギー充填率60%

霜「貴様にはこれだけで充分だ。地獄へ堕ちろ」

トリプルメガソニック砲

腹部より放たれた閃光は、しかしハドロン砲で相殺させられた。

（ソニック砲の相殺だと！？あのコアは調べてみたいが…無理だろう）

霜「くっ………天気は晴れだ！マイクロウエーブ！来い！」

空にある昼間の月から、マイクロウエーブが送られる。

（やはりアリーナは消し飛ばるか…）

霜月は、深く息を吐いた。

……

……

エネルギー充填率40%

霜「隼人、後退しろ！いつけええええ！！」

ツインサテライトキャノン

前面に出した砲身から光が溢れた。
対するガヴェインもハドロン砲を最大出力で放出した。

そしてアリーナが光に包まれた……

T o b e c o n t i n u e d . . .

10話 その青年、破砕（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。

11話 その青年、追想（前書き）

しばらくの間更新出来ず、申し訳ありませんでした。
だからアレは嫌いだ……
失礼しました。では……どうぞ。

11話 その青年、追想

side 霜月一

……不味い。やりすぎた…

確かにガヴェインみたいなやつは倒した。それこそ、塵も残さず消滅させた。

なのだが……

使っていた舞台、第二アリーナは…消滅した…

霜「ふむ、40%でこれか…威力としては申し分ないが…如何なものかな？」

ISのモニターで周りを確認してみる。どうやら皆無事のようにだ。あんぐりとはしているが。

霜「織斑先生。申し訳ない。アリーナを消し飛ばしてしまった」
織斑「……………」

へんじかないが、屍と言うわけでもないだろう。山田先生含めて何人が気絶しているし。

取り敢えず、さっきから上空にいる人に声をかける。

霜「社長。降りてきても構いませんよ」

ク「ああ。しかし、派手にやったなあ」

霜「わざとでは無いんですがね。半分も出してませんし」

社長ことクアトロは、自身の専用IS《0》でこちらに降りてきた。

0

クアトロの専用機であり、世代は不明。

見た目は であり、髭に貫禄がある（本人談）

戦闘能力は…わからない。戦っているところを見たことがない。

ク「さーて、いつちよやるか」

0は、上空に上がると、背中から虹色の粒子を出し始めた。

《単一能力 月光蝶》

突如、0の背中からおびただしい量の粒子が出て、アリーナのあったクレーターを包み込んだ。

月光蝶は、単一能力でありながら、《再生》、《破壊》、《防御》など、様々な用途に使うことができる、正にチートISに相応しい能力である。

数秒後、第二アリーナは何事も無かったかのようにそこにあった。

霜「あ、これ東博士作のISの腕です。研究してエネルギー充填率向上させてくださいよ」

私も何事も無かったかのように収納していたゴーレムの腕を出した。

ク「お、博士製かい。いいサンプルになるよ。ありがとう」

此方も特に気にして…する訳ないか。

霜「いえいえ、では、この埋め合わせは必ず」

ク「気にしなさんなじゃ、」

軽い挨拶をすませた後、0は”消えた”。何でも量子転換システムを応用したらしい。今頃は月に居るんだろう。

織斑「……おい、霜月。今のは誰だ」

お、織斑先生が我にかえったか。

霜「私の所属している、フォンブラウン社の社長です」

そう答えると、織斑先生はまた固まってしまった。もうソニック砲撃った事なんてどうでもいいようだ。撃った時少し焦ったんだが。

…何？撃たなければ良かった、だと？そう言われると反論出来ないではないか。あれで充分と思ったんだ。後悔しかしていない。

なんて馬鹿な事を考えつつ、学園はまた何時もの生活へ戻っていくのだった。

余談だが、この後一夏達から引かれた事は言うまでもない。

はあ、次はあの二人か…

ペアはどうするかな…

side ??????

ここは誰も知らない暗闇の中……

周囲には、様々な機械の部品や機器がある。

その真ん中で、ウサミミアリスは、固まっていた。

「……………」

彼女は、一夏達を鍛えるために送り込んだISを呆気なく破壊し、更に後から来た謎のISと戦闘していた様子を見ていて、漫画のよう
に目を見開いたまま固まっていた。

「何あれ…あんなのこの天才の束さん知らないよ…」

誰に聞かれるまでもなく、一人呟いた。

「あの機体、それにフォンプラウン社…調べてみる価値はあるね…」

その女性は、まだ若干顔をひきつらせながら、呟いた。

「あれじゃあ篝ちゃんの紅椿が負けちゃっ……」

深い溜め息を吐くと、また黙々とISの開発に戻った。

side 霜月一

… 久々に、前世の夢を見た。

今は学生寮の自室。隼人はフォン・ブラウンに戻っている。

話を戻そう。私は前世の死ぬ（殺される）少し前の夢を見ていた。

………

………

私は、モテなかった。それどころか、性格が災いし、高校では碌に親しい友人もいなかった。

テストはいつも下位。勉強してもあまり反映されず、虚しい日々を送っていたように今では感じる。

友人も居ることは居るのだが、いつも根暗のオタク扱いされ、正直辟易していた。

……思い返してみれば、あの日々は非常に空虚だった。
ただ学校へ行き、勉強して、帰って、勉強して、悪い点をとって親
に呆れられ、勉強して……

そんな日々でも、私には高校に行く理由があった。

私は、クラスの一人に、恋をしていたのだ。

恋愛経験などなく、女性に話しかける事の出来ない私は、ただ彼女
を見る事を支えに学校へ行っていた。少し思考が変態である、と今
は思う。

だが、そんな日常は長く続かなかった。

彼女は、身体の具合を悪くし、転校したのである。

別に私に他人をどうこうする権利などなく、片思いの人もいなくな
り、また何時もの空虚な生活に戻った。

その頃だっただろうか。こんにやくが頭にクリティカルヒットした
のは。

……

……

起きたら私は涙を流していた。昔を思い出したのか、あの気持ちを
思い出したのか。

あの世界に未練はない。此方は結構面白い。それ故、私は思うので

ある。

私が此処にいる意味は何なのだろうか？

ただ悪戯に人の運命を変えるイレギュラーの私が……

私は一人、再び涙を流した。

今日は休日である。あのままでいるのも嫌なので、敷地内をふらふらとしていた。織斑先生に捕まる可能性もあったが、どうでもよかった。

ふと、ハ口でも作ってみるかと思いつき、IS整備室を訪れた。む、中から音がするな。熱心な者も居るものだ。

取り敢えず私は中に入った。中に居たのは音を出していたその一人。髪は青色のセミロング、眼鏡をかけていて、少し近寄りたいたい雰囲気を出していた。

それが、私と彼女、更織簪との出逢いだ……

t o b e c o n t i n u e d . . .

11話 その青年、追想（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。

霜月に少し自分を投影してみました。霜月は変態ではないのであしからず。

レッツ、原作キャラ介入！

12話 ある少女、邂逅（前書き）

更新しました！

今回は書いている家に主人公が変わってきたので、タイトルも変えてみました。いつもより長めになっています。
では…どうぞ。

12話 ある少女、邂逅

side 霜月一

…休日に研究をするなんて思ったが、専用機を作っているのだったな。

私は彼女、更織簪に軽く一礼して奥へと入った。それほど広いわけではないが。

さて、技能を向上したので、当然開発能力もある。

さて、まずは本体から作るか。

side 更織簪

私がいつも通りISを作っていたら、男の人（確か一組の霜月君）が入ってきた。

今日は休日なのに…珍しい人だな…

私は霜月君に返礼すると、また作業に戻った。

霜月君で確かとても強い人だね。機械にも強いのかな？

と思っていると、霜月君がどこから取り出した金属板を丸く加工していた。あんな金属板あつたっけ？

つつい気になって、霜月君の手元を凝視していた。

side 霜月一

…後ろから視線を感じる。恐らく私を凝視しているのだろう。

本体は完成し、AIを作る工程に入った。

ペットタイプのハ口にするつもりなので、あまり難しい回路は作らなくても良い。

回路工程に入った瞬間、後ろからのプレッシャーが強くなった。ガ
ン見してるな…

……

…よし。出来た。後はこれを本体に取り付けて…

「ハジメマシテ、ハジメマシテ」

霜「ああ、宜しく頼むぞ。ハ口」

「ヨロシク、ハジメ。ヨロシク、ハジメ」

ふう、何とか完成したな。

side 更織簪

「ヨロシク、ハジメ。ヨロシク、ハジメ」

霜月君の作った丸いボールのような機械は、その言葉を発しながら跳ねていた。

…凄い。独立したAIで自意識を持っている…多分感情も。

それをこんな短時間で…

霜「さて……さっきからどうした？更織さん」

簪「……いえ……何も……」

霜月君は此方に歩きながら私に言った。

霜「ISを作っているのだろう？姉のこともあるだろうが、誰かに頼るのも手だ」

簪「……！……どうしてそれを？」

霜「さあ？どうしてだろうな？只忠告しただけだ」

そう言うと、霜月君は歩いていった。

簪「………何者？」

side 霜月一

更織簪……

昔の私と雰囲気が似ていたから声をかけてしまったが…私はまた人の運命を変えてしまったのか？

…まあ、頼られれば助けるか。

「ハジメ、ゲンキナイ。ドウシタ、ドウシタ。」
霜「さあな。どうしたんだか」

私は、今度の個人戦もといタッグマッチについて思考を巡らせていた。

隼人とは…恐らく組ませてもらえないな。
他の人は大体運命が決まっているからな。

……更織簪と組むのも悪くない、か。
まあ技術に関しては社長に相談だな。

私は、自室に向けて歩を進めた。

その時、

「待つて！」

s i d e 更織簪

私は、霜月君を追いかけていた。

霜月君に手伝ってもらいたい。

どうしてか解らないけど、そんな思いがあった。

簪「待って!」

私は、霜月君にむかって叫んだ。こんなに声出るんだ…

霜「む、どうした?」

簪「どうして私の事情を知っているのかは知らないけど、お願い!手伝って!」

霜月君はとても驚いている。私もどうしてこんなに声がでるのかわからない。

霜「…ふむ。願ったり叶ったりだな。わかった。手伝おう」

霜月君は少し考えるような仕草をした後、そういつてくれた。

簪「本当!」

霜「ああ。だが、次の個人戦までに仕上げるぞ」

簪「うん。わかった」

早く作れるなら早いに越したことはない。

霜「さて…社長に相談だな…」

霜月君が小さな声でそう呟いた。

簪「社長?」

霜「ああ。我がフォンブラウン社の社長に相談をして研究施設を使わせてもらおうかと思ってな」

唐突に恐ろしい事を言い出した。フォンブラウン社は暗部の更織家でも調べられない存在。そんな易々と案内して良いのだろうか。

簪「……………いいの？」

霜「勿論、君には黙って貰うことになる。が、IS開発が我が社の技術で出来るのだが、不満か？」

…霜月君や、もう一人の隼人君の機体を見て、技術力が凄いのはわかる。なら…

簪「……………わかった…お願いします…」

霜「うむ。では明日連絡する」

私と霜月君はひとまずメアドを交換し、別れた。

…これ、お姉ちゃんには絶対に言わない方がいいよね…？

side 霜月一

霜「……………と言う訳だ」

私は今、フォン・ブラウンの自宅にて社長に例の件について報告していた。

ク「あゝいいんじゃないね？もう直ぐそっちにも支社作るし」

霜「……………えらく軽いな…」

ク「大丈夫だろう」

…まあ、いいか。

side 更織簪

……………翌日

今日は日曜日。何時もはISを作っているけど、今日は違う。

霜月君に呼び出されて、アリーナの丁度死角にいる。

会社に行くんだから、やっぱり制服の方が良かったかな…。

今私は、私服のワンピースを着ている。男の子に呼び出されるのなんて初めて…

と、霜月君がこちらに来た。少し驚いているようだ。

…ちょっと酷くないかな？

霜「悪い。待たせたか？」

簪「……………ううん……………今来たところ」

霜月君も私服だ。やっぱりいいのかな？

霜「さて、行くか」

うん……………と言おうとしたとき、

霜月君に手を握られ、抱き寄せられた。

簪「~~~~!! / / / / /」
霜「すまない。こうしないと上手く転送できないんだ。少しの辛抱だ。我慢してくれ」

何か言ってるけど聞こえない。

うっ~~~~…私今多分顔真っ赤だよ〜

霜月君、男の子なのに、いいにおい……

気がつくと、私は寝かされていた。ここはどこだろう??

霜「気がついたか?」

見ると、上から霜月君が私を見下ろしていた。

簪「……ここ…どこ…?」

霜「ここか?私の自宅だが」

簪「…………… / / / / /」

…どうしてこんな事になっているんだろう…??

霜「どうした?具合でも悪いのか?」

簪「…うっん…全然…」

霜「そうか。なら、そのクローゼットにスーツがかかっている。それを着てくれ」

霜月君が指さすと、クローゼットが”自動で”開いた。

霜「私は隣の部屋にいる。着替えたら来てくれ」

そういうと、霜月君は隣の部屋に行ってしまった。

さっきからおかしいけど…ここ、どこ？

着替えた後、私は霜月君に連れられ、外に出た。そして私は目を丸くした。

未来都市

そんな表現がぴったりだった。

流石に車は飛んでないけど、明らかに地球の技術力を超えていた。

簪「……ねえ霜月君……ここ……どこ？」

霜「うん？フォンブラウン社のある、月面都市フォン・ブラウンだか？」

簪「……へ？月面都市？」

ここ、月なの？

霜「ここいう所は好きだろう？」

簪「…え？うん…でも…どうやって…」

あの短時間で月まで来る事なんて不可能だ…よね？

霜「来るときに君を抱きかかえただろう？」

簪「／＼／＼／＼…うん」

霜「その時に量子転換システムでここまで来た」

簪「量子転換システム？」

霜「つまり…」

かくかくしかじか

と言う訳だ」

そんなおかしな話、信じられないけど、信じるしか無いみたい…

その後私達は電車みたいな乗り物に乗って、移動した。

霜「着いたぞ。ここが本社ビルだ」

何ともまた近未来的な…

霜「む、そういえば」

簪「…うん？…どうしたの…？」

霜月君は振り返って、私に

霜「忠告だ。私を好きになるな。碌な事にならない」

そう言った。

簪「…？それってどういう…」

霜「さて、入るか」

霜月君は踵を返してさっさと行ってしまった。

「一様にお客様。本日はどのようなご入り用でしょうか？」

霜「社長に会いに来た」

霜月君は、どこからか聞こえてきた声にそう返した。

「かしこまりました。では、転送します」

声が聞こえた後、私達はさっきとは違う場所にいた。

霜「この先が社長室だ」

簪「…今のも？」

霜「ああ。転換システムだ」

呆然としている私を軽く動かし、我に返してくれた。

霜「失礼する」

簪「…失礼します」

ロボット系のアニメでよく見る扉の先には、20代の前半に見える男の人がいた。

ク「ご苦労、霜月。さて、ようこそフォンブラウン社へ、更織簪さん。私はクアトロ・ポイボス。当社の社長をやっている。宜しく」
簪「……更織簪です。…宜しくお願いします…」

クアトロさんは、椅子に深く座ると、溜め息を吐いた。

ク「早速だが、このことは口外してほしくない。守ってくれるとありがたいのだが、どうする？」

簪「…勿論、約束する」

ク「よろしい。では、後は霜月の指示に従ってくれ。霜月、いいな？」

霜「わかった」

ク「少し簪嬢と話がある。霜月、退室してくれ」

霜「？…わかった」

霜月君が出て行くと、クアトロさんは息を吐いた。

ク「簪さん。霜月の事、宜しく頼むぞ」

簪「…宜しくってどういう？」

ク「あいつは過去に苦い経験をしている。彼の苦しみを解いてやってくれ」

簪「…わかった…でも、約束出来ない」

私がそう言つと、クアトロさんはクスクスと笑つて、

ク「霜月の言つた通りだ。確かに堅いな」

笑いながら私にそう言つた。

その姿は、先程までの姿とは全然違つて見えた。

ク「なに、君は奴の事が少し好き何だろう？いや、多分好きになるだろう。愛情を持って接してやれ」

簪「……………わかった」

クアトロさんはまだ少し笑いながら、

ク「私の話は以上だ。ここの施設は霜月と使ってくれると有り難いな」

簪「……わかりました。失礼しました」

そう言っつて私も退室した。

外で霜月君は待っていてくれて、私と一緒に歩き出した。

霜「ふむ。今から研究所に行くか？それとも、もう少し見ていくか？」

簪「……研究所に行きたい」

霜「わかった」

道中他愛もない話をしながら、またあの電車みたいな物に乗り、別の所へ来た。

霜「失礼する。翼はいるか？」

翼「こんにちは。霜月さん。と、そちらの方は？」

簪「…更織簪です。」

霜「昨日話しただろう。ISを開発したいそうだ」

翼「ああ、その子か。僕は鈴峰翼だ。ここの研究所の所長をやっています。宜しくね」

霜月君より少し年上だろうか。翼さんはとてもここの所長には見えないほど若い。

翼「早速だけど、霜月君のGビット計画でベースの機体が無いんだ。少し時間がかかったけど……」

霜「その事なら心配ない。大体今の地球の四世代程度で良いよな？」
簪「…え？四世代？」

私は驚いた。だって、今世界は三世代に尽力している。それなのに、霜月君は”地球の”四世代”程度”と言った。程度って……

翼「ああ、ならコア入れて一週間程度で出来ます」

霜「うむ。この位でいいか？……更織？」

この人達は……

確かコアって東博士しか作れないんじゃないか？無かったっけ？しかも一週間でベースが出来るなんて……

簪「…いいの？」

霜「む？どうしてだ？」

簪「…こんな機体貰っちゃって……」

翼「こんな機体も何も、プログラムを入れるのは君だって聞いているよ？僕達は只君をサポートするだけだよ」

簪「……じゃあ…お願いします」

翼「オーライ。任されて」

翼さんは向こうに歩いていき、私の手を霜月君がとった。

霜「さて、時間があるな。私の家に行こう」

簪「／／／／…わかった」

それからまた、私達は電車で移動して、霜月君の家に戻ってきて、ソファアに座った。

霜「さて、更織はここではゲストの立ち位置だから、当然家はない。

この家を使ってくれ」

簪「…え？霜月君の…？／＼／」

霜「ああ。勿論配慮はする。風呂も2つ作るし、君が使う部屋には入らない。貸してるだけだからな」

どうしてだろう？少し悲しそうな顔になった。

簪「…ねえ、過去に何があったの？…力になるよ？」

霜「…無理だ。これを知ったら君はもう戻れない」

簪「霜月君に悲しい顔をされるのは嫌だ。昔、何があったの？」

どうしてこんなに話せるのかわからない。でも、身体の中に熱いものがある…。

霜「そうか…悲しい顔を私はしていたのか…昔の話は出来ない。君をこれ以上巻き込む事は出来ない」

簪「そう…」

しばしの沈黙、破つたのは私だった。

簪「……………私は……………霜月君の事が……………好き……………だから、力になりたい……………だめ？」

霜「……………私を慕ってくれるのは嬉しい。しかし、私はこの世界に居てはいけない存在なんだ……………だから……………むぐっ！」

私は、霜月君の唇に私の唇を押し付け、次の言葉を遮った。

簪「いつもの霜月君じゃない。私が近づいているのにも気付かないし、男らしくない。会ってから少ししか経ってない私が言うのも変だけど、私は何時もの私を助けてくれた霜月君が好き。今の霜月君

は霜月君じゃない。」

キスをしたことが不思議と恥ずかしくない。何かの感情が私を支配している。

簪「お願い。いつもの霜月君でいて。私を助けてくれた優しい霜月君でいて」

霜「……………いいのか？…後悔しないか？」

簪「したくないから言ってる。あなたが背負っているもの、教えて」

私は諭すように、静かにそう言った。

霜「……………この事を話すのは君が初めてだ。全て話そう」

……………霜月君の口から出たのは驚くべき事だった。

自分は転生した身で、この世界はお話であること、前世で味わった苦しみなどを教えてくれた。

霜月君の雰囲気から言っただけは嘘はついていない。

本当なんだ……………。

私は、途中から涙を流していた。悲しかった。ただ、彼が背負っていた物の重さが、悲しかった。

霜「……………泣いてくれるのか。私の事で……………」

簪「……………だって…悲しすぎるよ…辛かったんだね……………」

霜月君は、私を優しく抱き寄せた。愛しいものを抱くように、優しく

く。

霜「……………少し、疲れた…」

そう言つて、私の肩が熱くなった。私は只、彼の頭を撫でていた。

……………数分後

霜「君は……………私を受け入れてくれるのか？」

簪「…勿論。君の存在意義は私がある。私の事は簪って呼んで」

霜月君は、私を再び抱いた。

霜「簪……………私の事は一でいい。…無口よりもそっちの方が可愛いぞ」

簪「…頑張る。返事は？」

私がそう言った瞬間、彼は私の頭を手で優しく包み、

霜「…勿論、いい。君の事が好きだ…簪……………」

私と一は、ゆっくり、優しく、お互いを確かめるように、口付けをした……………

TO BE CONTINUED!

12話 ある少女、邂逅（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。

恋愛って…難しい…。

ひとまずヒロインは簪になりました。

隼人も誰かとくつつくよ。基本ハーレムにはしたくない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7432x/>

IS ~ Along with the memories ~

2011年11月1日03時15分発行